

平成州紙



おりおりの記

## 「奴雁」論

公益財団法人 資本市場研究会理事  
衆議院調査局財務金融調査室客員調査員

湯本 雅士

「奴雁」…かつての名総裁前川春雄氏お気に入りの座右の銘として知られているこの言葉は、一世代ないしは二世代之前の日銀マン（筆者もその世代に属する）にとって、格別の感慨と懐旧の情を呼び起こす。旅に疲れて川辺で一斉に羽を休め、仮眠を取っている雁の一群の中であって、ひとり首を高く掲げてあたりを見回し、仲間が狐狸などの天敵に襲われることがないよう、夜通し監視を怠らないその姿…それは、世の大勢が安逸を貪っているそのさなか、忍び寄るインフレの僅かな兆しをも見逃すことのないよう、懸命に目を凝らして暗闇を見つめ続ける中央銀行マンのそれと重なる。何と言う格好の良さ！ 生前の前川総裁の颯爽たる姿を記憶する多くの日銀マンにとって、これこそが理想の中央銀行マンのイメージだ、と思ったのも無理はない。この言葉はもともと中国の古書に由来するが、日本で広まったのは、この言葉を用いて学者に課された役割を説いた福沢諭吉の著作（明治7年発行「民間雑誌」第三編）によるとされる。

それにしても、これだけ格好のいい鳥が、なぜ「奴」雁なのであるのか？ 「奴」は、「あいつ」とか「やつこ」など軽輩を指すのに用いられ、「奴隸」「奴婢」などという言葉も頭に浮かぶのだが…。

よく調べてみると、問題は福沢諭吉にあるようである。典拠となった中国の古書によれば、この

言葉は、鴻（オオトリ一群れのボス）に命じられ、群れの周辺にあつて警備警戒に当たる雁を指すのだという（大漢和辞典第11巻）。何だ、そういうことだ

ったのか！ 「格好良く」胸を張った、使命感溢れる自己犠牲的精神のシンボルと思いきや、大ボスに命じられて、眠気をこらえ、嫌々ながらお役目を務める雁であったとは…。さすがの福沢先生も引用を間違われたのか…。世の中には、知らなければよかったのに、と思うことが少なくないが、この話もその類かもしれない。



さて、話を前川総裁がイメージされた意味での「奴雁」に戻そう。黒田総裁の前任者として、2008年から2013年3月までその職にあつた白川総裁のことである。世界経済が100年に一度の大波乱に巻き込まれた、まさにそのさなかに就任し、任期半ばにして東日本大震災という未曾有の災害に見舞われたというその巡り合わせ…。折から迷走を続ける民主党政権の下で、国民の間に醸成された言いようもない閉塞感の捌け口が、挙げて金融政策の運営ぶりに向かうという「不条理」…。

これらを甘受し続けた白川総裁の5年間は、その後続いた黒田総裁の5年間とは到底比較することもできない、シジフォスの神話にも喩えられる壮絶な闘いの軌跡であった。それに比べて、第一期の黒田総裁時代が何と平穏無事に映ることか…。かつてFRBグリーンズパン議長の下で副議長を務めたプラインダーは、神業とも言われたグリーンズパン議長のリスクマネージメントを高く評価しつつも、「やはり彼はついていた」と一言漏らしたと言われているが、このことは、「量的・質的異次元緩和」の効果を評価する際に念頭においておくべきことかもしれない。

だが、第一期に比べ、第二期のクロダノミクスが格段に厳しい状況におかれることになるであろうことについては、ほぼすべての論者が一致している。「これだけ困難が予想されている仕事を良くぞ引き受ける気になったものだ」とその勇気と覚悟を賞賛する者もいる。

なぜそれほど難しいのか…。伸びきったゼンマイを巻き戻す時期が近づいているからである。第一期は、「何はともあれデフレ脱却を」を旗印に、思い切ってゼンマイを伸ばし続けていればよかった。しかし物事には限度がある。このあたりで巻き戻しをしておかないと、いざという時に打つ手がなくなるというのが、世界の主要中央銀行が心中密かに案じていることである。この分野では

先駆者であるFRBは、既に5年以上も前から、いずれ来るべき「巻き戻し」に備えて極めて慎重に作戦計画をたててきた。しかしこれを実行に移す遙か以前から、市場はさまざまな波乱に見舞われた。そのはしりは、例の2013年5月の“tapering tantrum”であったが、今年2月初めの株式の暴落も、先行きの金利上昇を懸念する市場の反応の現われに他ならない。

先頭を走るFRBを眺める日本銀行が、先行き正常化のタイミングを問われて、「まだ考えてもいない」と言い続けたいくなる気持ちはわかる。しかし、永久に適温のスープを提供し続けることはできない。どこかで踏み切りをつけなければならない。幸いにして熊の足音はまだ聞こえてこないが、それに気づいた時はすでに遅い。今のうちに態勢を整えておく必要があることを国民に対してどのように説得するか…その間、市場にいらざる波紋を呼び起こすことのないようにするにはどうすればよいか…使命感に溢れた颯爽たる「奴雁」は、引き続き群れの先頭に立ってその格好良さを保つことができるか…黒田総裁に「英雄たちの選択」の時が迫っている。

(本稿執筆に際しては、日本近世政治思想史ご専門の平石直昭東大名誉教授より貴重なご教示を頂いた。特に記して謝意を表したい)